

れんげ草

池松 孝子

春に畑一面のというと、れんげ畑を思いおこす方も多いだろう。かつては至る所で見られた。「れんげ草」は春の季語であり、春の風物詩でもあった。それは緑肥、草肥として、また牛の餌としていろいろな恩恵を与えてくれた。中国では根が生薬として、ヨーロッパでは放牧していた羊の餌として活用された。羊が食べると乳の出がよくなると重宝されたという。また、れんげ草が生えていると雑草が繁殖しないともしう。れんげ草の花はミツバチの蜜源ともなり無駄のない植物である。

れんげ草は根粒菌の働きによって根に根粒がつき、これが窒素を固定するので稲の生育に適した土壌になる。人が空気から窒素を得たのは二十世紀になってからのことだという。マメ科の植物は大昔からこれを自然の中でやっていたのだ。「豆を植えると土が肥える」と聞いたことがある。土の中には生き物が生きていくための一定のシステムがあったのか。

なぜ、れんげ草の畑が見られなくなったのだろうか。れんげ草を緑肥として使う場合、九月の稲の収穫前に田の水を抜かなければならない。そこにれんげ草の種を蒔く。翌年、田植え前の田起こしまでに、れんげ草の根の窒素が十分になる期間が必要なのだ。ところが近年、田植えが早くなつてれんげ草の育つ期間が短くなったこと、田植えが機械化されたため、れんげ草が機械に巻き込まれて邪魔になることなどがその理由となっているようだ。

窒素を固定してくれるなど土の中に見られる自然界の営みを我々はひとつひとつ壊しているのだろうか。

休耕の一反れんげ草花盛り

長崎 桂子

ずいぶん昔の事。福岡県南の久留米を訪ねたとき、一反以上と思われる広い田は一面ピンクのれんげ畑であった。子供と一緒にあぜ道から畑の中央を目指して飛び込んだ。と同時に大の字に寝転がった。微かにれんげ草の生臭い香りが立った。そして背中あたりに湿気を感じた。

これぞ、野にあることの喜びだ。子供の遊びは自然の中にこそあったのだ。